

【体育科】

1 昨年度の授業改善推進プランの検証・評価

- 全ての児童が楽しく学べるように、運動の日常化やスモールステップで取り組むことのできる手立てを中心に授業改善を行った。その中でも、持久走カードや縄跳びカード、鉄棒カードなど自己の伸びを記録するためのツールを使用したことで、活動意欲の高まりにつながった。
- △器械運動や陸上運動などの個人種目になると児童によっては取組が消極的になる姿が見られたため、グループでの教え合いや資料提示にICTを活用し、技術向上のための指導の工夫が必要である。
- △ボール操作の技能の向上や対話的な学びについての指導は改善する必要がある。
- 持久走の記録向上に向けて、体育の授業を通して意欲的に練習に取り組む児童が多かった。また、持久走に苦手意識のある児童は一定のペースを保って走るなど自分に合った目標を設定して活動に取り組んだ。
- 体力、食事、休養、睡眠の大切さについて児童への指導を図るとともに、保健便りなどで情報提供をしたことで、児童の実態や意識の共有を図ることができた。

2 学習状況の分析と課題

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
調査結果の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・ボール遊びをする児童に偏りが見られる。 ・ゲーム領域や投の運動の授業の様子からも児童の苦手意識が見られる。 ・高学年において、器械運動や鉄棒運動、水泳運動への苦手意識をもつ児童が多く見られる。 ・健康な生活や安全については、理解できている児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己やチームの課題発見や課題解決のための練習の仕方や作戦を工夫することには個人差が見られる。 ・チームの課題や、作戦について思考できているものの、それを友達に伝えたり、実践できるよう行動したりすることには個人差が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しみながら運動する児童と、運動に消極的な児童の二極化が見られる。 ・健康面では、食が細い児童、食べるのに時間を要する児童などがいるが、食べようと努力している。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・運動に苦手意識がある児童も楽しく取り組めるように、運動の日常化やスモールステップでの課題解決など、児童の意欲喚起を促すための手立てが必要である。 ・自己やチームの課題発見や、課題解決のための練習の仕方や作戦を工夫させるために、課題別の資料を用意するなど、手立ての工夫が必要である。 ・器械運動や陸上運動などの個人種目になると児童によっては取組が消極的になることがある。グループで中間の考えや取組を認め合う機会を増やすことで運動の楽しさを実感させたい。また、ICT機器や課題解決のための練習の仕方を明確にした資料を提示することで、運動の知識・技能を高められるように取り組む。 		

3 授業の具体的な改善策

教科目標	<p>学習指導要領の教科の目標</p> <p>体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康の保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し、判断するとともに、他者に伝える力を養う。</p> <p>(3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。</p>
全体	<p>主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善</p> <p>健康・体力の向上のため、児童自らの目標を設定させると共に、学習過程を工夫して児童に身に付けさせたい知識及び技能の習得を図りながら、児童に課題解決のための助言をしたり、気付いていない視点を資料で提示したりする。また、学びに必要な指導の在り方を追究し、場面に応じてICTを活用するなどして、課題解決の場を積極的に設定していく。体力テストの時期には、実施前に動画を視聴させたり練習させたりする機会を設け、技能向上を図る。</p>
学年段階別改善策	
低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・運動遊びの感覚で、夢中で運動に取り組めるような教材を取り入れることで、休み時間や放課後にも児童が進んで運動に取り組めるようにする。 ・運動に苦手意識のある児童もすすんで運動に取り組めるような教師の声掛けや学習カードの工夫を行う。また、運動遊びを通して、単元の中で身に付けさせたい動きが自然と獲得できるように十分に遊ぶ時間を確保する。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム領域では、練習の仕方や作戦などをグループで対話できる時間を十分に確保し、取組に対して適切に価値付けをする。また、児童や学級の実態に応じて、ゲームの規則を工夫することで、一人一人の運動の機会を保障する。 ・器械運動領域では、ICTを活用し、自らの動きと手本となる動きの違いに気付き、技能を追求できるようにする。 ・体力、食事、睡眠の必要性について、保健の授業などを活用して、指導する。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の導入で、主運動につながる補助運動を取り入れる。毎時間、継続して、補助運動を取り入れることで児童に獲得させたい動きが自然と身に付くように促す。 ・器械運動領域では、ICTを活用し、自らの動きと手本となる動きの違いに気付き、技能を追求できるようにする。 ・体力、食事、睡眠の乱れが見られるため、必要に応じて個別に面談をする。また保護者会等で話題にし、家庭との連携を図る。